

「どうすればみんなが利用しやすいお店を作れるだろう」

「How much is this TV?」(このテレビはいくらですか?)
「……………」

ダンボールで作られたテレビを手に、フィリピンから来たJICA研修員が英語で尋ねると、思わず顔を見合わせる子どもたち。

10月下旬、東京都江東区立第六砂町小学校の体育館では、一風変わったワークショップ形式の授業が行われていた。参加するのは4年生の児童42人。レストラン、美容室、電気屋さん、おもちゃ屋さんなどが並ぶ体育館は、まるで一つの街のようだ。各シヨップでは、店員に扮した子どもたちが、車いす利用者、視覚障がい者、聴覚障がい者、高齢者などに接客している。その中には、日本語が話せない4人のフィリピン人女性の姿もあった。

障がいがあってもなくても、言葉や文化、年齢などが違っていても、誰もが不自由なく快適に暮らせる街づくりを。この「ユニバーサルデザイン」という考え方は、近年、公共施設の整備などに取り入れられている。例えば、車いす利用者なども使える多機能トイレ、車いす利用者や子ども向けの低い位置にも飲み口を取り付けた水飲み場、普通より広めの障がい者用の

の駐車場などはその代表的なもの。また、歩道によくある黄色い「視覚障がい者用の誘導ブロック」の上に自転車を放置しないことや、エレベーターでは車いす利用者や高齢者を優先することなど、マナーや心掛けの面でも、その理念が通じるものは多い。

この日、第六砂町小で行われたワークショップの目的は、子どもたちにユニバーサルデザインを体験してもらうこと。JICAがフィリピンで実施する「地方における障がい者のためのバリアフリー環境形成プロジェクト」



車いす使用者の一人として、長年ユニバーサルデザインの普及に力を注ぐ、建築家で東洋大学教授の川内美彦さんがワークショップに参加。川内さんは、2010年2月にJICA専門家としてフィリピンも訪れている



レストランでは、「外国人客」相手に子どもたちがメニューの説明に一苦労



にぎわうワークショップの様子



ユニバーサルデザインの推進に積極的に取り組む江東区では、2010年3月、障がいがある地域住民などと協力してハンドブックを作成。区内43の小学校に通う児童約2万人に配布された



“店員さん”に扮してユニバーサルデザインを体験!

誰でも不自由なく安心して暮らせるよう、施設や製品などを設計する「ユニバーサルデザイン」という考え方。これを体験するためのワークショップが、東京都江東区立第六砂町小学校で開かれた。さまざまなシヨップの店員に扮した4年生の前に現れたのは…。



電気屋さんで、「外国人客」のJICA研修員の要望を聞く、店員役の男子。片言の英語で、一生懸命値段を伝えていた

の関係者が、ユニバーサルデザインの推進に積極的な江東区を視察することがきっかけとなり、ワークショップに、外国人のお客さん役で参加することに。どうすれば誰もが不自由なく利用できる店を作れるか。いろいろな特徴を持つお客さんへの接客を通して、42人の児童たちが考えた。

フリーピンにも届けたい
誰にでも優しい街づくり

「こんな少しの段差でも、車いすの人は通れないんだ」「耳が聞こえない人のために、メモ用紙を持っておくべきなんじゃない?」「お年寄りには目が見えにくいので、値札は大きく書かないとね」

お客さんが訪れるたびに、子どもたちは店内の不便な点や改善点を発見し、対応策を話し合う。

そんな中、特に考え込んだのが、外国人役のJICA研修員が店を訪れたときのこと。「何を欲しがっているんだろう?」「お釣

りってどう言うの?」。初めは接客にとまどっていた子どもたち。だが次第に、ジェスチャーや片言の英語を駆使したり、紙に絵を書いてみたりして、少しずつ意志の疎通を図れるようになった。美容室では、「シャンプー」「カット」などのサービスを身ぶり手ぶりで一生懸命説明する姿に、研修員も感激した様子。片言の会話から「フィリピンでは髪を切る間に手足のマッサージもしてくれる」ことが分かったときには、子どもたちの間から驚きの声が上がった。

ワークショップを企画・運営した江東区都市整備部の堀江敏郎さんは、「言葉や習慣の違いで日々の生活に不便を感じる外国人の対応も、ユニバーサルデザインに欠かせない視点です。子どもたちも実感できたことでしよう」と話す。「外国人のために、きちんとした英語のメニューもあった方がいいね」という声も聞かれた。

一方、このワークショップではJICA研修員も多くを学んだようだ。彼女たちは、母国で障がい者に優しい街づくりを目指す行政官。フィリピンではユニバーサルデザインの普及は始まったばかりで、障がい者の社会参加についてはたくさんの課題を抱えている。

「他者への思いやりと配慮を根付かせるには、次世代への教育が何より重要だと感じました」と言うのはデ



ワークショップ終了後、「お客さん」役の地域住民と区の職員に感想を發表する男子児童。日ごろから江東区のユニバーサルデザイン推進に協力し、さまざまな提言を行っている障がい者の人々も参加してくれた

ルフィナ・バキールさん。プロジェクトを指揮するJICA専門家の鷲谷大輔さんも、「子どもたちの経験は、自然と家族や地域へ広がっていきます。フィリピンでもこうした試みを通じて人々の意識が変わり、障がい者をはじめできるだけの多くの人が参加しやすい社会環境になれば」と話す。「僕たちでも工夫すれば、言葉の異なる人や障がいのある人の力になれることが分かってうれしかった」

おもちゃ屋さんの店員に扮した男子児童が、最後に誇らしげに話してくれた。誰にでも優しく快適な街づくりは、きつと、そんな一人一人の小さな気付きと行動の積み重ねから始まるのだろうか。